妖怪陰陽師

氷雨水夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖怪陰陽師

【Ｎコード】
Ｎ７４０９Ｉ

【作者名】
氷雨水夜

【あらすじ】
時は現代。妖怪も幽霊も存在しないと言われるこの世の中、ぶっちゃけ本当はいる。己自身が思っている以上に。当然、それらを退治する陰陽師だって存在する。ただ、知られていないだけで。
『目には目を、歯には歯を』とはよく言ったもので、今存在する陰陽師の家系で妖怪には妖怪で対抗するものがいる。他の同職の者からは異端児としては見られているけれど。
―――これは、そんな異端な家系に生まれてしまった少年の陰陽師噺。とても不思議な妖怪噺。

其の壱：小さき陰陽師（前書き）

妖怪モノをやってみたくてこうなった。

とてもなんちゃって妖怪噺デス。

なんちゃってだから何でもアリの方向で見てくれれば……

其の壱：小さき陰陽師

妖怪、それは人の念だと言われる者。それはこの世の存在ではないと言われる者。
それを滅すのは陰陽師と言う職である。
時が経つと妖怪話も少なくなり、陰陽師も歴史の中に埋もれてしまった。

だが、この現代にも妖怪や陰陽師は存在する。ただ、知られていないだけで。

そんな、今残っている陰陽師の家系の中に少し変わった者がいた。
神霊を式神とするのではなく、敵であるはずの妖怪を式神にするのである。善意のある妖怪だけならまだしも、悪意のあるモノすら式にしてしまうのだ。

故に彼らの家系の陰陽師はある通り名で呼ばれた。

“妖怪陰陽師”と。

現在は４０代目となる少年がその名を継いでいる。
彼は式守（しきもり）　和樹（かずき）。現在、ごく普通の高校に通う二年生。
高校内では彼が陰陽師だと言うことを知っている者はいない。
ただ“例外”を除いては。

和樹は苦笑いで右隣をチラリと見た。

隣には白い肌に長いストレートの髪、同年代とは思えぬ大人びた容姿は美人と言うしかないくらいに綺麗だ。しかし、顔には表情が無く、ムスッとしているようにも見える。

彼女は白雪（しらゆき）　冷華（れいか）と言う名で過ごしていた。彼女の本名は冷禍。和樹の最初の式神であり、妖怪『雪女』だ。

最初の式神と言っても実際に式としたのは先代の和樹の父であった。その所為か昔の彼女は先代の命とはいえ、和樹の式に降ることを嫌っていた。このような子供に従う価値などあるのか、と。

雪女：冷禍が和樹の式になろうとしたのは、まだ彼が小学生の頃のこと。

「雪女、和樹はどこか知らないか？」

和樹の父、静葉（しずは）がそう訪ねた。ちなみに彼は３０歳だが、どう考えても２０歳にしか見えない青年である。

「知らぬ」

素っ気なく答えると笑いながら言葉を返す。

「ダメじゃないか、雪。言ったろう？お前はもう俺の式ではなく和樹の式なのだと。俺の直感だが、恐らくアイツは歴代の当主の中で１、２を争うかもしれない程の潜在能力がある。俺の力は衰えていくばかりだしな、早くアイツに継いで貰わなければと思っている。そこで、さっさと雪に式になってもらって陰陽師という自覚を持ってだな……」

「まだ現実も知らぬ餓鬼にか？……ったく、お前と言うヤツはいつも何かしら気が早い。私はあの小僧の式に降る気など全く無い。私は力を認めた者にしか主と認めぬ」

「……ってことは俺は認めてくれてるってことかな？いっつもツンツンしてる雪が自分を認めてくれてると思うと何だか嬉しいな」

そう答えると雪女の顔が少し赤くなった。

「なっなななな何を言っている！わっ私はただ、事実を述べようと

してるだけでっ！！」
「んー？一体何で動揺してるんだ？お前は」
「わかって言っているだろう！あんまりニヤニヤするなっ！」
「いやいや、俺は何のことだかわからないなぁ。このツンデレさんめ☆」
彼女は若き頃の静葉が好きだったが、その静葉も今現在の妻のことが好きだったこと、妖怪と人間は相容れない存在という考えから諦めた。たまにその時の静葉に対する想いを思い出してしまい、つい顔が赤くなってしまう。だが、静葉にはそういったことがバレているらしく、こうしてたまにからかわれる。

「おとうさん、あそんで」

幼い声が響く。和樹だ。
「おっと和樹、どこにいたんだ？姿が見えないから変なところへ行って危険な目に遭っているかもしれないと思って心配したぞ？」
「……親バカめ」
雪女が小さく呟く。
「ごめんなさい。あそんでほしくてずっとおとうさんをさがしてたの」
「和樹、そういうことはこの雪お姉ちゃんにしてもらえ」
「……誰がお姉ちゃんだ」
静葉はわざとだろう。和樹の式に早くなってほしいからこうして少しでも多く交流させようとする。
「ねぇ、おとうさん。まえからおもってたんだけど、どうしておねえさんのことを“ゆき”ってよぶの？ようかいのゆきおんなだからっていったけど、ぼくにもおとうさんにも、みんなみんななまえがあるのにどうして？」
「え、いや、それは……」
妖怪には名前が無い。種族の名を呼べばそれだけで自分のことだ

とわかるからだ。
「……妖怪だからだ。理由などそれ以外になど無い」
困った様子の静葉の代わりに面倒くさいと思いながらも答えた。
「それなら“れいか”ってよんでいいかな？」
「……は？」
「ずっとかんがえてたんだ。おとうさんのしきたちのなまえ。それでゆきおねえさんのなまえは“れいか”」
「あはははっ！そうだなっ、今日から雪の名前は“れいか”だ。漢字でどう書くか考えるか」
「考えなくてもいい！私に名など要らぬ。私は雪女だ。力弱き者に名を与えられたくは無い！」
そこまで言って彼女ははっとした。少し強く言い過ぎたか和樹が涙目になっている。
「よわいからぼくのこと、きらい？なまえも、いや、だった？……ごめんなさい」
そう言ってとたとたとどこかへ駆け出して行ってしまった。

――どうして、弱いとダメなの？

「あ……」
一瞬、和樹と誰かの姿が重なったように見えた。
「……主よ、すまぬ」
「謝るのは俺じゃないだろう？というかアイツ、昔の俺にそっくりだな。状況は違うけど誰かに好かれようとしてるところが」
そうだ、一瞬重なったのは静葉だ。
「少し、出かけるぞ」
「ああ、わかった。和樹をよろしくな」
「……あの小僧を捜しに行くのではない。少し出かけるだけだ」

そう言って後を追いかけるようにしてスタスタと行った。姿が見えなくなると、静葉は誰に言うわけでもなく呟いた。

「やっぱり雪ってツンデレだよなぁ……」

とても脳天気な言葉を。

其の壱：小さき陰陽師（後書き）

最初は雪女編。
ツンデレがツンデレに見えないのは水夜クオリティ。

以下、つぶやき。

・式守とか、白雪は実際にある名字らしい。さっき調べた。

・若作り父さん美形なつもり。ちなみに高校生の和樹も父似なつもり。

・『妖怪だー☆魔物だー☆』とキーワードにつられた人、ゴメンナサイ。これは前書きにもあるとおりなんちゃって噺なので。

・そろそろ女の子が主人公の話を作るべきだと思ったのはここだけの話。

そんなこんなで他の話共々これから『妖怪陰陽師』よろしくデスー☆

其の弐：毒は雪に混じりて

「はぁ……」
自分は一体何をしているのだろう。いくら主の子だからって、一瞬、初恋の主の小さい頃と重なったからって追いかける必要なんて無いはずなのに。ましてや、式として降るつもりのない奴なのに。

「……あ」
白い花だった。とても真っ白で綺麗な……
この花には見覚えがある。静葉が雪にピッタリだからと教えてくれた花。確か名前は――

「スノーホワイト」

「――！！」
答えたのは雪女ではなく和樹だ。いつの間にか横にいた。先ほどまで泣いていたのか顔が赤い。

「ぼくね、このはなはおねえさんみたいだっておもうんだ。とてもきれいで、しろくて、ほんもののゆきみたいで」
――まるで雪みたいな儚い花。雪女であるキミのようだね。

「どうして――」
そんなことを言えるの？拒絶したのに。
続きの言葉が出てこない。

意をくみとったのか、和樹が彼女の目を見て言った。
「いまはよわいけど、おねえさんのためにがんばるから。しきになってもらえるようにがんばるから……」

スノーホワイトの花を摘むと雪女に差し出した。
「このはながやくそくのしるし」
――この花に誓おう、決してお前を裏切らないと。

この子供は、静葉と似ている。たとえ拒まれても、また認められるよう問題に立ち向かう。
「ああ、約束する」
雪女が花を受け取ろうとしてかがむと和樹は彼女の髪にさした。
「え……？」
「うん、とってもにあうよ！ありがとう、れいかおねえさん」
和樹が「じゃあね」と言ってその場を離れた。おそらく時間的に陰陽の勉強をやりに行ったのだろう。
一人残された彼女は顔が真っ赤だった。
……この子供は……和樹は……性格まで父似だ……
恥ずかしいことをさらりとやってのける、天然たらし……

正直、雪女は思った。７才でこんな性格では未来の姿が不安だと。

――そして、それから１０年後。
高校生となった和樹は容姿端麗、成績優秀、性格は温厚で優しい

青年になっていた。
白雪冷華――否、“冷禍”は和樹の周りに取り巻きが出来ていたのに気がついた。

「和樹くんっ、勉強を教えてほしいのっ！」
「えええぇぇっ～！私と一緒にやろうよ～！！」
「うるせぇぞ、女子っ！俺たちが和樹に教えてもらう予定なんだっ！！」
「……え、あの……」
当人である和樹はすごく困った顔をしながらオロオロしていた。

勉学の出来が良くなかったからと言って騒がしい。だがこのまま放っておいて、和樹を連れ出されるのを黙って見ているというのもどうかと思う。何故だか自分で想像しておいて、よくわからない苛立ちやら何やらモヤモヤした複雑な感情が自分の中を巡っているのがわかる。

「えと……ごめんなさい。今日は……その……白雪さんが……一番最初に勉強を教えてほしいって言ってたから……」

「……？！」
何だソレ。聞いていないぞ、そんな話。
「え、そうだったの？確か白雪さんって頭いいよね？ってことは聞こうとしてるのは超難関問題とかそんな感じ？？」
いや、そこの女子、よくそこまで想像で話をふくめられたな……
「やめとこ、やめとこ。超難問題解いてるとこと一緒にいたら私の脳みそパンクしちゃうし」
あの……それ違……
「じゃあ、明日こそは教えてねー、和樹くん☆」
「なら俺らも予約で、頼むわ。んじゃ、バイバイー」

皆さっさと教室から出てってしまう。
教室には陰陽師とその式が残されていた。

気まずい雰囲気の中、二人で式守邸の屋敷に帰る途中。
「……」
「……」
冷禍が沈黙を破った。まるで恐る恐る言うかのように。
「……和樹？」
「……あー、えと……ごめん。みんなと話してる時、何か冷禍が怒ってるように見えたから、さ」
「何を言う。私は怒ってなどいないが？」
嘘だ。絶対に自分は何かに苛立っている。
「……そうだ！冷禍見てて！」

空中に簡単に印を結んだ。
『天地来来（てんちらいらい）――冬蛍（ふゆぼたる）』

一瞬のことだったが、二人の周りに雪が舞った。

「あれ……？失敗しちゃった……」
落ち込んだのか悲しげである。
「失敗……なのか……？」
「……うん。もっと長い時間、綺麗に雪が出るはずなんだけど……」
「むぅ……」と唸るように呟く。その直後、先ほどよりも多くの雪が舞った。

「……へ？」
「……雪なんぞ、私の力で降らせるだろうが」
「そう……だね……。やっぱりもっと特訓しないと……」

余計落ち込んだ様子だったのでため息をついてから教えるように言った。
「……私は和樹の式だ。特訓ばかりではなく、己の式の力を把握してもらいたいものだが？」
意地悪そうに微笑む。
「……あ、うん。なら今日帰ったら少し特訓して冷禍のこと聞いてもいいかな？」
意地悪だと気付かずに素直に受け答えをする。
「と、ととと突然何を言っているっ？！」
「……？だから冷禍の力を知っておこうと思って」
「そ、そうだな。そう私が言ったんだよな」
「……何を慌ててるの？」
彼は疑問なのか首を傾げている。

「そういえばさー。やっぱり学校での名前みたいに本名も『冷たい華』にしない？せっかく名字は白雪でスノーホワイトの花って感じなのに……」
さすがに学校では『禍』の字はどうかと思ったので『華』にしたのだが。
「またその話か。いつも言っているだろうが。私は妖怪雪女、誇りを忘れぬために『冷たき禍』でいい。綺麗な名は姓だけでいい」
そう告げると、和樹は残念そうだった。
「絶対に可愛いと思うのになぁ……」
「――……っ！」
「あれ、どしたの？顔真っ赤だよ？」
「何でもないっ！早く帰るぞっ！！」
「ちょっと待ってよ、冷禍ー」

白雪姫は林檎を食べた。

それはとても甘い毒。優しさと純粋な甘い毒。

今日も彼女は毒林檎を食べる。

本当の自分の想いに気付かぬ白雪姫、種族の違いに悩む姫。

あなたと一緒にいたい、守りたい。

そのために私はあなたの無垢な毒を受け入れる。

其の弐：毒は雪に混じりて（後書き）

ということで、雪女編。

冷禍は静葉を好きになったはずなのに和樹を好きなのかわからないという矛盾（汗

でも、恋ってそういうもんだよね☆

というか最後の毒の意味、わかってくれる人いるのかなぁ……。

毎度の駄文ゴメンナサイ……。

次回からようやく陰陽師っぽいことやれるといいな……

其の参：葉は樹に語り始めん（前書き）

お久ー☆

２０１０年最初の投稿ー

其の参：葉は樹に語り始めん

「ねぇ、父さん。そろそろ教えてくれてもいいんじゃないかなぁ？」

本日は学校が休みで、速攻で課題を終わらせた和樹は修行をしていた。

その最中、今まで若作りな父、静葉が和樹のとある疑問に答えてくれなかったことを、突如思い出した。

そこで思い立ったが吉日、静葉を探して問いただすことにした。

「えー、あー……」

静葉は言葉を濁している。おそらく疑問をはぐらかすための理由を考えているのだろう。

しかし、今日こそはうやむやにされる訳にはいかない。

「俺はもう高校生だよ？未熟なところはすごくあるけどさ、いいかげん教えてくれてもいいでしょ？」

「だ、ダメだ！未熟だからこそダメなんだっ！！」

毎度ながらすごく慌てているのが怪しい。

「例え未熟でも、式守の屋敷を見て育ったからわかるんだよ？この家系は『妖怪陰陽師』と言われるほどなのに妖怪が冷禍しかいないなんて……」

和樹が物心ついた頃、この屋敷に唯一いた妖怪は雪女だけだった。

幼い頃から、式守家は妖怪を式神にする陰陽師ということを聞かされていたからこそ、一体しかいない妖怪に疑問を持ったのだ。

「静葉、いいかげんに話したらどうだ？いずれ和樹に話さねばいか

ぬことだろうに……」
冷禍がお茶を持って部屋に入って来た。湯飲みを静葉と和樹の前に置く。
「ゆ、雪……。まさかお前、和樹の味方？」
「味方も何も。もう話してもいい頃合いだろうが。それに今の私は和樹の式故、静葉と言えど私は主の希望を優先する」
きっぱりと言い放った。
「うぐぅ……」
「そんな漫画みたいな声出さないでよ」
「な、なら話してやる代わりに人のこと笑うなよ？怒るなよ？」
一体何が笑えて怒れる答えだと言うのだろう。
「じ、実はな……。昔、俺が子供の頃だった時だ……」
式守家は、子がある程度の力を身に付けると、現当主は自分の式神を子に譲る。
式によっては、弱々しい力量では降らないという者がいるため、ある程度の力が必要なのだ。
和樹の祖父、静葉の父にあたる３８代目当主。
彼もまた、幼き静葉に己の式を継がせようとしていた。
しかし、病を患い若くも急逝。
主を亡くした妖怪たちは次の主となるはずの静葉の力を見定める

ことにした。
当時の静葉は素質はあっても力は目覚めていなかった。
大半の妖怪たちは屋敷から出ていき、まるで呪縛から解き放たれたかのように悪事を働くようになってしまった。
「つまり……それって……」
「ああ、俺が未熟なばかりにな……。だからお前が寝た後、毎晩夜な夜な出ていった妖怪を探しているんだ」
「……嘘をつくな」
疲れた様子で言う静葉に向かって、冷禍がピシャリと言った。
「な、何を言い出すんだっ！嘘じゃないだろ？」
「何が毎晩だ。ちゃんと探していたら一匹ぐらい見つかるはず。だが未だに収穫はゼロ」
嘆息をつきながら言葉を返す。
「……父さーん？別に妖怪が逃げちゃったことはいいとしよう。それぱっかりは仕方ないからね。ただ見つけてすらいないってどういうことか説明してくれるかなあ？」
「……ちょっ……和樹っ！怒るなって言っただろ？！」
「うん、“妖怪が逃げた”ってことは怒らないよ？でも“収穫がゼロ”っていうのは別☆」
静葉は、我が子から黒く禍々しいオーラが見えた気がした。
その後、屋敷内に悲鳴が響いた。
「……」
静葉は体の一部が凍った状態で正座させられていた。

和樹の【天地来来】と冷禍の雪女の力で凍らされたのだ。

「つまり、父さんが毎晩飲み歩いた結果である、と」

「こ、これでも人脈広いから……その……誘われたら断れないと言うか……」

「ほう……？『今日は〇〇に行くぞー』といつもの如く聞こえたが？」

冷禍が即座に静葉の言葉を否定した。

「父さん☆」

和樹は明るく呼び掛けるが、その目は笑っていない。

「な、なんだ、和樹☆」

戸惑いながらも静葉は同じように明るく返してみた……が、それは逆効果のようだった。

「……少しは……謝罪しろーっ！！」

再び、屋敷に悲鳴が響いたのは言うまでもない。

其の参：葉は樹に語り始めん（後書き）

久しぶりだけど相変わらずの駄文ｗｗｗ
次回更新は不定期過ぎていつになるのやら…（笑

其の四：残りし妖怪

「酷い……酷いぞ……家庭内暴力の域だ……ＤＶだ……」
ボロボロの静葉はシクシクと泣いている素振りをした。
「何が、ＤＶだ。自分が悪いのだろうが」
呆れている冷禍の横で何か思案するように和樹が何かを考えていた。
「……どうかしたのか？」
「あ、いや……その……さっき父さんの話で『大半の妖怪が屋敷を出ていった』って言ったよね？」
「……それが何だ？」

「『大半』ってことは、この屋敷には冷禍以外の妖怪がいるってこと？」

率直な和樹の疑問に静葉も冷禍もポカンとした様子で和樹を見た。
「あれ？俺、何か変なこと聞いた？」

「……親が親なら、子も子か」
「……我が子ながらそれはないだろう」
二人からそれぞれ呟きが聞こえた。

「え、ど、どういうこと？！」
「いいか、和樹。精神を集中して陰陽の力を高めてみろ」
和樹は困惑しながらも父の言葉を素直に受け止め、集中する。
「雪と似たような力、妖力（ようりょく）が他にも感じないのか？」

力、チカラ――

「――あ」
「わかったか？」
「小さい力の妖怪が何体かいる。そして大きい力……一体どこから……？」
冷禍が呆れているのが分かった。居場所がわからないのかという憐れみのこもった顔だ。
和樹は今以上に集中して陰陽を高める。
「えっと……あれ、なんか…隅っこに小さいのが……あ」

――何かいる。
それはとても手ぐらいの大きさで…鬼のような角がはえていて……
「もしかして、『家鳴(やなり)り』？」
そう呼んだ瞬間、子鬼はビクッとしてパニックになって――こけた。

家鳴り。
家や家具を揺らして悪戯をする妖怪。力はそこまでなく、妖力もそこまで無い。
子鬼の姿をしていて、どこかすごく可愛らしい。

「家鳴り発見、よく出来ました」
静葉は拍手をして和樹を褒めた。
「小さいだろ？なのに自分より大きい家具を揺らすからすごいんだよな～」
家鳴りは冷禍にとてとてと近付いた。

……同じ“妖怪”なだけに安心出来るのだろうか。

冷禍は何かに躊躇した様子で家鳴りを見ている。

「冷禍、どうしたの？」
「……いや……その……別に……何でもない」
彼女は言葉を濁した。何故だろう。
「……触ればいいだろう。相変わらず可愛いモノが好きだな、雪」
静葉の言葉に納得した。

――そういうことか。

「可愛いモノが好きって、やっぱり冷禍って女の子だね」
「な、何が言いたい！」
凄くパニックに陥っている様子だ。

「え？そんな所が可愛いなあと思ったから」

――少しの沈黙。
「ばっ、ばばばばかか貴様はっ？！」
「なんだ、なんだ？いつの間にそこまで進んでたんだ？」
「進んでなどいないっ！！子が馬鹿なら親も馬鹿かっ！」
この二人の掛け合いが始まった元凶である少年はなんのことだかわからない。

「……なんの話？」
「お前、無自覚？！天然で言ったのか？！！」
「え？無自覚？だから何のこと？」
「仕方ないなあ、俺が話し……ぐはあっっ？！！」
静葉が雪女の力によって凍りついた。
「……和樹、馬鹿は放っておいて大きな妖力とやらの根元を探してみろ」
父が凍った理由がよくわからないが、今それを冷禍に聞いたら自分も凍らされる気がしたのでやめた。

和樹は再び集中し霊力を高め、陰陽の気を身に纏わせる。

――……不思議な感じだ。冷禍や家鳴りと違って周りから妖気が伝わるような……

「……？」

「何かわかったか？」

「…外に出てみていい？」

「別に構わないぞ」

和樹は襖を開け縁側から降りた。

……ああ、なんだ。そういうことか。

「父さん、この屋敷ってどれぐらい前から建っているの？」

「さあな。少なくとも彼の有名な安倍晴明の時代からとは誰かから聞いたことがあるな」

これで、確信を持った。

「この屋敷は『付喪神（つくもがみ）』、だよね？」

静葉と冷禍はとても優しく小さな陰陽師に微笑んだ。

其の四：残りし妖怪（後書き）

心なしか長くなりそうだったので分けてみましたv
静葉さんが不憫なのは気のせいデス（笑）

家鳴りの姿の個人的イメージは『しゃばけ』の家鳴りで。
家鳴り出したのは可愛いモノ好きな冷禍を出したかっただけなんデス……

其の五：遊びの前に

ギシ……ギシ……

何か動く音がする。

「君は……」

呼びかけると『……ギシ……』と一回だけ、まるで肯定するかのように音がした。

「式守家の初代の時から建ったとされている屋敷だからな、付喪神になっていてもおかしくはないだろう」

「でもいつ見ても新築って感じだよね？」

「歴代の当主が術で外観を風化から守っているからだ」

冷禍が問いに答える。

「全然気付かなかったなあ……」

幼い時から陰陽師としての特訓をこの屋敷でいつもしていた。

しかし、それに今現在に至るまで気が付かなかった和樹は己の未熟さを改めて痛感した。

ギシギシ……と音がした。

「……『気にするな』とあやつは言っている」

「ありがとう。えーと……」

屋敷に対して名はどう呼べばいいのだろう。

「『部屋の屋に志しと書いて【屋志（ヤシ）】とお呼び下さい』だと」

「わかったよ、屋志」

鳴らす音がどことなく嬉しげに聞こえた。

「……さて、そろそろ探しに行きますか」

「あれ、行くのか？」
「そんなに驚きか？事は誰のせいだと……」
冷禍の手の周りに雪が舞う。
「ちょっ、ストップストーップ！」
「まあいいよ、冷禍。俺の陰陽師らしい初仕事ってことでさ」
「おお！　わかってるじゃないか！！　流石、我が息子！」
「あ、父さんは帰ったら氷づけの刑だからね」
「マジでか？！」
「マジだよ☆」
和樹はわざとらしく笑顔で返した。

「――と、まあ勢いで外に出たは良いものの」
嘆息をついて誰に言うわけでもなく呟いた。
「まだお昼なのに出るわけないよなあ……」
己の無計画さに我ながら呆れた。
暫くの沈黙の後、冷禍がその言葉に対してかのように言葉を放った。
「……いや、そうでもない」
「え？」
「我々――あやかしは夜だと妖力が高まるだけで、昼に弱いなんてことはない。たまに、昼に弱い者も居るが」
だが、昼にはあやかしとしての能力は使えないのではと疑問に思い聞いてみた。
「お前は、前に雪を降らせようとして《冬蛍》を使ってみせたことを覚えてないのか？」
「……あ」
そういえば、それで上手くいかなくて冷禍が軽く雪を舞わせたのだった。

「流石に、夜と比べたら劣るがな。……だから、奴等を見つけるのは夜の方がやりやすいが、おそらく説得するのは昼の方がいいだろう。闘うなんてことも無いとは言いきれないからな」
メリットがあればデメリットもある。
昼は妖力は人の気配に埋もれて見つけだすことは相当困難だろう。一方、夜は妖力が強まり人通りも少なくなるので見つけやすくなる。しかし、妖怪としての強さで見れば、昼は弱く、夜は強い。
これから妖怪を探すにあたって、注意しなくてはいけない点であるかもしれない。
……まだまだ陰陽師として未熟である和樹にとって、どちらのデメリットも正直、キツい。
とりあえずは昔居たあやかしを知る彼女に聞いてみることにした。
「冷禍、心当たりみたいなのってある？」
「……一体だけ。あることにはあるが……」
冷禍は深く思案していた。それを和樹に言おうか言わまいか迷っているような仕草で。
「ある『が』？」
「今のお前の実力ではそいつは後回しにした方がいいだろう。……アレは危険、だ」
正直、話している冷禍がキツそうな表情だった。
「何が危険かと言うと、性格がこの上なく危険だ。普段は気さくな奴だが、戦いともなると性格が変わる。簡単に人を殺めかねない勢いを持つほどにな。おそらくだが、あやつの性格を考えて確実に戦うことになるだろう」
「そ、それなら……仕方ない、か……」
未熟なせいで。
唯一手がかりがある妖怪の元に行けない。なのに、どこか安心してしまった。おそらく、危険性のある妖怪に会わなくて済んだからだ。そんな自分の感情に酷く悔やんだ。
思わず、俯いた。

「今夜、学校ね、陰陽師さん」

「……っ！？」

慌てて和樹は顔を上げ、後ろを振り向く。

今、聞こえた声は、小学生くらいの少女のようだった。だが、道行く人の中に、少女はおろか、子供は居ない。

「どうした、和樹？」

「今、声が。声が、聞こえたんだ。子供の、女の子の声だった」

「声？」

冷禍は聞こえなかったのか、怪訝そうに和樹を見た。

「『今夜、学校ね』って。『陰陽師』とも言ってた」

「それは――！」

和樹を陰陽師と知るのは静葉や冷禍、屋志や家鳴りの、あの屋敷にいる者のみ。おそらく、屋敷を出た妖怪たちは冷禍のことを知っている。彼女が式守家に残ったことも。そしてそんな彼女と一緒にいる和樹はあやかし特有の妖力がない。それで、和樹のことを『陰陽師』と判断したのだろう。――まさか、向こうから声をかけてくるとは思いもしなかった。

「一体、どうして――」

「女の子のような声。今まで反応すら見せなかったくせに、急に和樹に話しかけてきたこと。……花、か？」

冷禍は今までの記憶を手繰るが如く、考察をしている。

「『花』？」

「座敷わらしで、名前は花。式守家に居た少女の妖怪にして、やや気まぐれな性格の持ち主だ。だが、声の正体が花であるとするならば少し安心だ」

「どうして？」

「怨念などの負の念に当てられていなければ、ただの『遊び』程度で戻ってきてくれそうだからな」

負の念。憎しみ、怒り、悲しみと言ったマイナスの感情が残留思念となったもの。わずか数十年の時だけでも、負の感情が積もりやすい場所は悪鬼の巣窟とも言っても過言ではない。
心配なのは声の主が夜の学校を選んだこと。妖力も上がるうえに、負の念のたまり場とも言ってもいい場所である。たとえその座敷わらしだったとしても、負の念の当てられれば悪しき妖怪に変わってしまうかもしれない。
「心して行かないと、だね。頑張ろう、冷禍」
「ああ」

偶然か、それとも奇跡と言うべきか。すぐにあやかしの手がかりを見つけた2人は帰って夜に備えることにした。

――この時、和樹は、冷禍でさえも、まだ知らなかった。
とても過酷な『遊び』をするはめになることを。

其の五：遊びの前に（後書き）

ホントは妖怪探しは次話で今回まではまだ屋敷内の会話のはずでした。そうしたらあまりにもあっさり終わったので、急遽、一話に妖怪探しも収めました。……話の展開が早いデス、自分でも思いましたとも。

次話からはマイペースでスローペースで行けたらと思いマス。

其の六：遊びましょう？

日がすっかり沈み、深い闇に覆われたこの外界は静寂に包まれていた。

和樹は冷禍とともに学校に居た。

「妖怪だけに、丑三つ時とかじゃなくても良かったのかなぁ……」

今夜と言われただけで細かい時間の指定は無かったので、九時に来たのだが。

「別に構わないだろう。ただ、最もあやかしの妖力が高まる時間が丑三つ時、弱い妖怪でも相当強くなる。それまでには何とかした方がいいな」

――成程。冷禍が昼間に言っていた負の念のことも考えたら尚更早めに勝負をつけた方がいいだろう。

丑三つ時は今で言う二時頃。今から五時間あるが、初仕事とも言うべき彼にとっては、長いのか短いのかわからない。

「……で、あの妖怪はどこにいるんだろ……」

「案外、丑三つ時に出てきたりしてな」

「えー、あと五時間はあるよ？」

冷禍は「そこか」と苦笑する。

「本当にそうなったらどうするの？」と笑いながら答えると思ったのだ。

だが、実際に丑三つ時なんて時間に出てこられたら困る。長年、式守家に仕えていた妖怪と、実践経験の無い人間は不利過ぎる。

結果、そんな不安はすぐに消えることになった。

“彼女”が現れたからだ。

「ちゃんと来てくれたのね、陰陽師さん」

「花……！」

冷禍に花と呼ばれた彼女は、とても小柄で、彼岸花の模様が目につく真紅の着物を来ていた。
髪型はおかっぱで、いかにも座敷わらしらしい外見だった。
「雪女も来たのね」
嬉しげに言うその声は、昼間に聞いたそれだった。
「では、改めてはじめまして。花は座敷わらしのお花だよ」
少女らしい話し方だが、どこか大人びたようなものを感じさせる。
「……花、負の念に影響させられていないようだな」
「だって、花は負の念になんか惑わされない妖怪だもん」
冷禍が一応確認をすると、子供らしく可愛げに頬を膨らませた。
「花は、平気だよ。悪いモノは悪いって視れば分かるから。貴方は静葉に似てる。“あの人”にも似てる。それに、力の波長も似てるから、陰陽師さんだってすぐにわかったの」
「……あの人？」
小首を傾げると、冷禍が答えてくれた。
「３８代目、お前の祖父のことだ」
「そういえば、雪女、貴女はどうして陰陽師さんの所に居るの？」
さも本当は理由なんて知っているとでも言うかのように笑った。
「それは……」
言葉が濁る。何とも答えがたい表情だった。
彼女はそこで何かに気が付いたようで、その問いを誤魔化そうとした。
「わ、我が名は、今は『冷禍』と言う名だ！雪女じゃない。もう、冷禍という名がある！！」
「『冷禍』？静葉が付けたの？」
とても嫌そうな、何か哀れなモノを見るような、そんな顔をしていた。
「違う、ここにいる『和樹』と言う次期４０代目式守の名を継ぐ者が私に付けたんだ」
「ふーん？やっぱり貴方、『式守』なんだ……。でも変な感じがす

るわ。“いくら先代と先々代に似てる”とは言え、違う。“こんなに身に纏う力、しかも異なる力が自然に混ざっている”なんて」
「……え？」

どういう意味だろう。

自分は、何かが違う？『式守』には特別な意味でもあるのか？
違う力？未だに自分は未熟だ、不思議な力などあるわけがない。

冷禍の方をちらりと見ると、彼女は戸惑っている顔つきであった。
和樹に言いたくても言えない。まるでそんなことを言っているように思えた。

「くすくす。今の貴方が気にする必要なんてどこにもないの。むしろ、気にしてはダメ」
ダメ？……ああ、もう疑問が多すぎて何が何だか、混乱してきている。
「……花、もうそろそろ本題に行かせてほしい」
「ふふ、いいわよ？」
「お前は、どうして屋敷を飛び出した？そして今になって、和樹にここに来るように仕向けた？」
和樹の横で彼女は質問をする。
別の意味で質問をしたいと思っている少年は困惑して、話についていけない所だった。
ハッと我に帰り、一旦自分の中の謎に蓋をして、話を聞くことにした。
「飛び出した理由なんて簡単よ。みんな飛び出して行ってしまったから、その場のノリで」

「……は？」
「だからノリよ」
白き娘はポカンとしている。着物の少女はそんな彼女を見てけらけらと笑っている。
「みーんな、出ていくみたいだから、一緒に飛び出しちゃったの。自由っていいなって思っちゃった。けど、落ち着かない」
表情豊かな彼女が一変、声が感情のこもらないものとなり、無表情に切り替わる。
「私って座敷わらしだから。建物の中で、建物の主の福を呼んでいた方がよほど落ち着くの。転々と色んな人を幸せにしたけど、暫くして寂しくなったの。ホームシックって奴なのかな」
「それで、俺に？」
「ええ、そうよ」
ただ、淡々と返す。
「別に静葉が『式守』の名に相応しくない力だったとかじゃない。良く思っていなかったわけでもない。私はその場のノリで屋敷を飛び出し、寂しくなったから彼に声をかけた。ただ、それだけ」
その微笑みがどこか恐ろしく感じてしまった。一見、ただの少女なのに。
「ねぇ。私、屋敷に戻ってもいいわよ？」
「本当に？！」
つい声が裏返るくらい驚いて言ってしまった。
「条件はあるけどね。その条件を満たしたら、私は屋敷に戻ってもいい」
「……満たさなかったら？」
「寂しいから、一旦式守の屋敷には行くけど、暫くしたらまた外に、誰かの家に行くわ」

どうしてまた外に行くのかと思ってしまったが、それが伝わったのは定かではないが、彼女は答える。
「静葉がどうであれ、貴方が次期当主になる者だと言うのならば、見極めなくてはいけないのが、式守に使えた妖怪。静葉の力は確かにあまり高くなかったけれど、私たちを纏める能力には長けていたわ。だから、私自身は一応静葉を当主として認めてはいる。でも、貴方はどうかしら？貴方に私が認めるような部分があればいいのだけれど。もしも、認めようと思えなかった人物が次期当主だったらいくら私でも嫌だからね。だから、これから出す条件を満たした時、私は貴方を認めるわ」
彼女は少しの間を置いて、言う。
「お二人さん、遊びましょう？」
少女との“遊び”が始まろうとしていた。

其の六：遊びましょう？（後書き）

お花ちゃん、登場の巻。最終話までに回収できるかわからないけど伏線を何本か張ってしまいマシタ。
そして、次回の“遊び”ではｇｄｇｄ展開になる気がします。ｇｄｇｄにならなかったら展開が早いものになっている気がします。頑張るしかないデスネ。
……そしてテストが終わったら再びテスト的な残念な日程に泣きたいデス……ｏｒｚ

其の七：闇より出でし甘き声

「遊び……？一体何の？」
「陰陽師さんの力を視る為の遊びよ」
目の前の座敷わらしはクスクスと笑う。
「鬼ごっこ。陰陽師さんが鬼、ね？」
「……え」
「これが私からの条件。さあ、『遊びましょう』？」
とてもあやかしとは思えない朗らかな口調だ。
「１０秒経ったら私を探して捕まえる。ただの鬼ごっこ。鬼さん、こーちら、手のなる方ーへ♪」
本来、扉が開いていないはずの校舎へ入っていく。
「冷禍……、これ、どういうこと？」
冷禍は“遊び”だと、昼間に言っていた気がする。
だが、花が条件と言ったので、“遊び”などしないと思っていた。
そもそも“遊び”と言っても、まともな遊びを思い浮かべていなかっただけに、鬼ごっこをやると言われては拍子抜けである。
「あいつは永遠に子供のままだからな。ただの遊びと捉えていいかもしれん。花の遊びに付き合ってやれ」
「は、はぁ……」
渋々、校舎の扉を開けて中に入ることにした。
ここの学校って設備とか警備とかが甘いなぁと思いながら。
中は漆黒の暗闇に包まれ、騒音とはまるで皆無であるかのような静寂だった。
精神を集中し、周りに花の妖力を探す。自分の中で力が研ぎ澄まされていく感覚がある。
「……っ！？」
妖力が、二つある。隠そうとしているのか微弱に感じられる小さ

な力と、それに相対するかのような大きな力。
やや和樹に遅れて中に入った冷禍も驚いた顔をしていた。その表情から妖力が彼女のものではないと理解できた。それだけではない。校内へと入った途端に冷禍の妖力を感じることができたことから、まるで学校と外が別世界であるかのように感じた。
「な、んだ、これ……。こんな、現実から隔離されたみたいに、まるでおかしな別次元みたいに……」
「落ち着け、和樹。私も最初は驚きはしたが、よく考えれば、おそらくこれは花の能力だ」
「能、力？」
和樹は首を傾げはしたものの、何か力があってもおかしくないと感じた。同じ妖怪の冷禍は雪女として、雪を操る能力を持つ。家鳴りは力も弱いものの、何体もの家鳴りたちが一致団結することで家など何か物質を揺らす能力を得る。屋志に関しては分からないが、恐らく何かあるのだろう。
それと同じように、花も何か持っていると考えるのが妥当だろう。
「花の妖としての能力、確か……【幸福領域】。本来人が持ち合わせている運気を操り、幸せを呼ぶ力だ」
「運気を操るって……、もしかして俺たちの運が下げられてるかもしれないってこと？」
もしも下げられているとしたら、少女を捜すことが困難になるのではないか。これは、人間の普通の『遊び』ではない、妖怪の『遊び』なのだ。
和樹に焦りの色が少し浮かぶ。
早めに終わらせなければ、花の妖力が高まる上に、負の念の障気も濃くなってしまう。まだ始まったばかりで、その時はまだ先だと言うのに、和樹は走り出した。ただ闇雲に、何も考えずに。
「お、おいっ！？和樹っ？」

冷禍の声など耳に入らない。妖力を集中して探すという考えも和樹には浮かばない。片っ端から教室や特別室の戸を開けていく。
途端に、足が動かなくなった。足下を見やると、まるで氷が接着剤のように足と床を繋げていた。
「落ち着け、馬鹿者」
冷禍が、ひんやりとした妖力を撒き散らし、冷ややかな眼で和樹を見ていた。
急いで和樹を追ってきたのか、少し息が荒れている。
「運気が乱れ、普通に探してはろくに見つかりもしない状況でいきなり走り出すな、馬鹿」
「ご、ごめん……」
「いったん頭を冷やせ。深呼吸して今現在の状況を考えろ、そして分析しろ。陰陽師の仕事は、妖を滅す、封じるだけではない。探し物を占術などで占うのも、立派な陰陽師の仕事だ。……分かったか？」
「……うん、ごめん」
和樹は己が未熟なのだと改めて感じた。いくら陰陽師として修行を積んでいても、実践経験が無ければ、その修行の意味なんて無かった。さらに今回の和樹は簡単に焦ってしまった。修行もまだまだ未熟だったのだろうか。
ああ、嫌になる。己の、未熟さに。
――絶望シロ。
声が、響いた。頭の中に反響するように。
――己ノ力ノ未熟サニ絶望シロ。
「だ、れ……？」

――弱クテ周リニ迷惑ヲカケタクナイダロウ？

その声は甘く囁いてくる。その誘いにはのる訳にはいかないと本能が訴えていた。

――コノママダト、父サンモ雪女モ、和樹ヲ見捨テチャウカモシレナイネ。

「そ、れは……」

「和樹っ？」

冷禍の声が、した。

意識を周囲に向けると先程の冷ややかなものとは異なり、心配そうな眼で覗き込んでいる。

「どうした……？急に惚けていたが……」

「うん、何でもないよ……。ただ、足が、冷たいかな」

「あっ、そのすまなかった！止める為とはいえ……」

冷禍が慌ててその凍てついた氷を溶かす。

凍らされていたのは少しの間であったが、足下が冷やされていたせいか身体全体が寒く、苦笑する。

謎の声は、いつの間にか聞こえなくなっていた。最後の最後に、一言だけ呟いて。

――マダ、ダメミタイダネ。

無邪気な子供のように。妖とはまた違う、恐ろしい笑みを浮かべているように感じた。

其の七：闇より出でし甘き声（後書き）

テスト前に書くのは良くないデスネ。それに今年は大学受験なので本来勉強していないといけないはずなのデスガ……。
そんなこんなで久しぶりに陰陽師、其の七デス。今のうちに伏線ぺたぺた。これから冷禍のツンデレっぷりを書きたいデス……。

其の八：闇色の声は諦めず

――占い。

方法にも様々な種類があるが、どの陰陽師も使える訳ではない。使えたとしても方法によっては得意不得意がある。

基本的に盤を使う者、高度な陰陽師は呪力や妖力を扱うらしい。

和樹の場合、盤は苦手であり、ましてや今この場に盤を持ってきていないから使えない。陰陽師としては未熟でもあるので呪力や妖力を扱う程の力は持っていない。

そこでどうするかだが、和樹が得意とする占術が二つある。

一つは、自然から力を借りる。『天地来来』もその一つである。

……だが今は学校。　学校には庭や花瓶などに植物があり湿潤も自然環境には適してはいるが、建物の中にいる以上、外壁が邪魔をして外の力を貰いにくい。

だから、もう一つの方法を使う。

それは、『波長の一致』。

己の式神と妖力の波長を同調させ、お互いの力を使用可能にする。

今の和樹の場合、式神は雪女である冷禍のみ。よって冷禍と同調するということは先程の『天地来来』の氷の型である『冬蛍』を強化させ、冷禍の得意とする雪の技が使える。彼女と同調した場合は氷のエキスパートになるということだ。

また、普通の式神ならば同調すると主たる陰陽師の術も使えるが、式守家の式神は己を滅す技であるためなのか使えないという欠点がある。

「冷禍、波長を合わせてもいいよね？」

和樹のその言葉に、冷禍はやや顔をしかめた。
「花を探し出す為に、力を強化するんだろう？ならば、仕方無いことなのだがな……」
「どうかしたの？」
「あー……、その同調するといつも変な感じがするというか、なんというか……」
目をそらしたその頬はやや赤く染まっていた。
だが、和樹は首を傾げたまま、彼女に言った。
「よくわかんないけど……始めるよ？」

刹那、二人の周りを霊力が立ちこめ始めた。
「我、式守の名において、契約せし者に命ず。かの力、我が血肉とならんことを望まん」
ザワッと己の血が騒ぐのを感じる。
「あっ……」
和樹の近くで冷禍の身体がびくっと跳ねた。
「汝、雪女は今この時より我が同胞（はらから）。我が眷属なり」
波長を一致させる為の呪文を言い終わる。
冷禍の力が流れこんでくると同時に、冷禍が何故か息を切らしているのが伝わってきた。
そして、

――クスクス。

笑い声。その無邪気な声はさっき頭に反響したそれだった。
和樹からしたら分かっていたことだった。いつも同調するたびに何かが身体でざわめくのを知っていたから。
とはいえ、それがさきの声だったとは今気付いたことだったのだが。

――モット、モット、力ガ欲シイヨネ。

「また……お前かっ……！」

和樹はうずくまっていた。声がする頭を押さえながら。

――モット、タクサンノ妖ト同調スレバ、イイヨ。

「うるさい、五月蝿い五月蝿いっ！！」

「かず、き……？」

――ソウスレバ、僕ハ君ト話ガシヤスクナルカラネ。

「お前なんか知らない！僕の中に入ってくるなっ！！」

「しっかりしろ、和樹っ！」

「……レイ……」

その一言は和樹とは思えない、重みのある声だった。

冷禍は初めて目の前の少年を和樹として認知できなかった。

「……え？」

「どうしたの、冷禍？」

一瞬、怯んだが、目の前の少年はいつもの和樹の表情で冷禍を見つめていた。

「い、いや、大丈夫なのか？さっき、頭を押さえてうずくまって、なにやら叫んでいたのだが……」

波長を一致させると言うことは相手の体力や精神面を読みとれてしまうことがある。それなのに、声を荒げていた和樹からは何も感じ取れなかった。

「僕が、何か、叫んでた？」

和樹は自分が何を言っていたのかも分からない様子で冷禍に聞き返した。

「……大丈夫そうなら、いい」

「じゃあ、花がどこにいるのか、調べようか」
目の前の少年は何事も無かったように言う。
きっと、気のせいだったんだ。自分は疲れているんだ。……そう、冷禍は思うことにした。

其の八：闇色の声は諦めず（後書き）

スミマセン、謎の声さんを引っ張りやがりました↑
其の七を見直していたら、「あ、あの部分書いてないじゃん」となりましたので再び謎の声登場デス。
次こそはＶＳ花が本格的に始動シマス。よろしくお願いシマス。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7409i/

妖怪陰陽師

2011年10月24日02時04分発行